

第6章 和歌山県B中学校

- 生徒の授業評価を生かし、全教員で授業改善に取り組む学校改革 -

B中学校は、過去に生徒が荒れたことがあったが、今は落ち着いた良い学校となった。この学校の特色ある取り組みは、生徒会活動の活性化、体験学習の重視、生徒からの授業評価を取り入れた校内の授業研究、異種校・異学年との交流活動、生徒との対話活動、小学校の保護者への「学校だより」の配布である。この改革を成功に導いた要因として、校長の学校改革の理念、問題の生徒への厳しい対処、授業規律の徹底、国際交流、教育委員会からの支援、核となる教員の存在が考えられた。

1. 調査の方法

(1) 調査時期及び調査方法

1) 平成16年11月2日

B中学校は5年前まで生徒が荒れていた中学校だが、全教員による校内の授業研究会などの試みによって生徒の荒れが治まり、現在生徒の学力が向上している学校として評価が高い。そのことから、学校を訪問し、教育事務所長が隣席する中で、校長に自校が取り組んだ学校改善の背景、過程、成果について3時間程度インタビューを行った。

2) 平成17年1月13日

校長がB中学校に就任した当時の学校の様子、その様子を見て校長はどのような対策を採ったのか、また現在その成果として生徒の学力面にどのような効果が見られるのかを校長に電話で尋ねた。

(2) 収集資料

- 『平成16年度 学校要覧』
- 『平成16年度 指導計画』
- 『平成16年度 授業研究・授業アンケート 取り組みの流れ』
- 『平成16年度 各教科通知簿「観点別評価および5段階評価の評価基準」「授業研究に向けて」取り組みの柱』
- 『平成16年度前期 授業研究 学習指導案集』
- 『平成16年度前期 指導案作成・授業研究を終えての感想』
- 『平成16年度 「授業研究」前期の授業アンケート結果』
- 『平成16年4月 町教育委員会委託研究「道徳教育」研究の趣旨』
- 『平成15年度 各教科通知簿 観点別評価および5段階評価の評価基準』
- 『平成15年度 授業研究「生徒が意欲を持って主体的に授業に取り組む生徒が主役の学習集団づくり」』
- 『平成15年度 授業アンケート 結果と考察』
- 『平成15年度 授業研究 学習指導案集』
- 『平成15年度 授業研究 第2回研究授業を終えての良い点・反省点』
- 『平成15年度 指導案作成・授業研究を終えての感想』

2. 学校の概要

(1) 学校の基本特性

B 中学校は、昭和39年に町内4中学校を統合し、町内5小学校の全てを校区とする「一町一中学校」として発足した。教員数（講師を除く）は、男性が14名、女性が11名である。生徒数は、下の表に示すように499名（男子257名、女子242名）である。しかし、年々、少子化の影響を受けて、生徒数は減少傾向にある。この学校の学級編成は、1年生が5クラス、2年生が4クラス、3年生が5クラスである。

地域性としては、近年宅地開発による人口の流入からベッドタウン化が進み、町内事業所を含め、隣の市に勤務する会社員や公務員が増加しており、果樹や米作を中心とする農業従事者は減少している。

学 年		1 年	2 年	3 年	合 計
生 徒 数	男 子	94	72	91	257
	女 子	75	89	78	242
	計	169	161	169	499
学級数		5	4	5	14

(2) 学校の教育目標及び教育方針

この中学校の教育目標は、「憲法・教育基本法を踏まえ知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな生徒の育成」であり、その目標の達成に向けての教育方針を以下のように定めている（収集資料）。

1. 学問を大事にし、すじ道を立てて考える生徒を育成する。（知性、思考力）
2. 豊かな感性と心情をもった生徒を育成する。（道徳的実践力）
3. 丈夫な体づくりに取り組む生徒を育成する。（体力・活力・意志力）
4. 仲間を大切に作る生徒を育成する。（連帯感）
5. 自ら考え実践する生徒を育成する。（主体性・自主性・自律性）
6. 生命を尊び人権を尊重する生徒を育成する。（人間尊重）

(3) 具体的な努力点

上記の教育方針を領域別に分けて、具体的な努力目標が以下のように記されている（収集資料）。

1 . 教科指導	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習集団の授業づくりと授業改善の推進 ・ 基礎学力定着と指導内容の精選や指導法の工夫 ・ 学習意欲と自主的な学習態度の育成 ・ 家庭学習の定着 ・ つまずき指導と再学習の場の充実 ・ 社会的視野の拡大（教材の開発）
2 . 健康の増進・体力づくり及び安全教育	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保健指導の充実と健康管理のできる生徒の育成 ・ 性教育の充実 ・ 部活動の充実 ・ 自分の安全を守ることでできる知識と技能、態度の育成（命を守るヘルメットの着用）
3 . 生活指導（生徒指導）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 基本的な生活習慣や学習における基本行動の確立 ・ 個々の自立を目指す個別指導の充実 ・ 民主的な学級集団づくりと学年集団への発展 ・ 生徒会による自主活動の育成 ・ 自らの生き方をみつめる進路指導の推進
4 . 人権と福祉の教育	<ul style="list-style-type: none"> ・ 仲間を大切にする民主的な集団づくりと正しい人権認識、豊かな人間認識の涵養 ・ 障害者施設や福祉施設との交流活動の推進、福祉体験や交流学习を通しての相互理解の深化 ・ 人権と福祉の教育の指導計画や児童生徒支援教員の位置づけの確立と、人権教育の充実
5 . 情操教育	<ul style="list-style-type: none"> ・ 感動体験を通しての豊かな心と感性の育成 ・ 優れた芸術作品の鑑賞や多様な文化活動の推進 ・ 校内美化活動の推進と学習環境の整備 ・ 公共物を大切にする心の育成

（４）平成１６年度の学校経営の基本方針

この中学校では、「平成１０年度よりの『教科研究指定校』の成果を継承し、その実践活動をより充実させるため、『学習集団の授業づくり』を中心とした授業改善を積極的に推進してきた。特に、授業改善の視点を『生徒の実態に即して、教師自らが授業をどう変えていったか』と設定し、具体的な実践目標を『分かりやすく、学ぶ喜びが味わえる、楽しい授業を工夫する』とし、その取り組みを充実させてきた」。

平成１６年度は、これまでの成果をさらに発展させて「町の研究指定を受け『道徳教

育』の推進を図るとともに、地域社会に対して授業公開や地区懇談会を通じて、本校の現状や指導課題について広く理解を求めながら、地域ぐるみの指導援助や協力体制の充実にめざした取り組みを推進する」ことと定められた（収集資料）。

（５）教育課程

この中学校の時間割は、別途示した（収集資料）。月曜日から金曜日までの朝学活の後、全学級に10分間の読書の時間を設定している。この時間は、担任、副担任も生徒と一緒に読書を行う。この時間は、50分を1単位として換算し、「総合的な学習の時間」の一部として位置づけている。また、毎日の終学活の後には10分間のチャレンジ・タイムがある。チャレンジ・タイムでは、学年毎に国語、英語、数学などの教科の基礎学力の向上を目指し、漢字の書き取り、計算演習、英単語などの演習を行っている。この時間も、担任、副担任が教室に出向き、生徒の指導にあたる。このチャレンジ・タイムも50分を1単位として選択教科の一部に位置づけている。

したがって、6時間目まで授業があるのは木曜日のみで、その他の曜日はすべて5時間目で終わるようにしている。そうすることで、できる限り多くの時間を部活動に充てることができるからである。ただし、火曜日の6時間目は、各週の欠けた授業時数を補うための学校裁量の授業時間として確保している。

（６）学校内部組織と運営方法

この学校の運営組織には、各校務分掌に加えて、学校の状態を把握し今後の方向性を検討するために2つの運営会議がある。一つは、毎週1回開かれる学年主任会議（各学年主任、特殊学級の主任、教育相談室担当、教務主任、教頭、校長）である。この会議では、1週間の授業関係の打ち合わせや各学級の課題などが話し合われる。もう一つは、生徒指導主任会議（校長、教頭、生徒指導主任、各学年生徒指導主任、養護教諭）である。この会議では、主に生徒指導関係のことについて話し合われる。校長は、この2つの会議を通して学校の状態を掌握し、今後の方向性や対応策を各学年に指示するようにしている。

また、校務分掌組織には、加配教員による不登校生徒対応の相談室を設けている。この担当者は、主として担任との連絡を密に取りながら各学級の不登校生徒の動向を把握し、家庭訪問を行ったり、不登校生徒への対応について研修を行ったりしている。

（７）運営管理

人事管理面では、この学校の様々な問題や課題に対応するため、県の教育委員会から加配教員が配置されている。この学校にとって一人でも多く生徒への目配りと細やかな指導ができる教員がいることは大変重要である。現在、2年生の普通学級が1クラス40名で4学級のため、生徒の学力低下への影響を懸念し、1学期より英語と数学に限り40名を20名ずつに分けて週3時間の少人数指導を実施している。既に3年生の選択教科（数学）においては習熟度別学習を実施しており、その効果はほぼ確認されている。

危機管理面では、東南海地震に備えて、教育事務所を中心に地震への対策マニュアルを作成している。そして、2年生には、消防所職員の指導の下に4時間の救命救急の講習会を受講させている。また、校門の開閉については、夜間は閉めるが、昼間は常時開けてお

り、監視カメラを設置している。

3. 学校改革に向けた特色ある取り組み

(1) 生徒会活動の活性化

校長が5年前にこの中学校に着任した時、この中学校は大変荒れていた。例えば、授業を受けずに教室を出歩いたり、昼休みに消化器をまき散らしたり、非常ベルを鳴らしたり、生徒総会で教員に暴力をふるったり、校内で喫煙をしたりといった問題が起こっていた。

しかし、学校がそうした状況の改善に着手し、2年前から生徒が落ち着きだした。現在では生徒会活動が活発化し、生徒会が斬新なアイデアを出して生徒自身がこの中学校を変えようという思いに変わってきた。以下に挙げるのは、生徒会活動の成果の一端である。

1) 「日本一の学校」を目指す

以前、校長が「この学校を日本一の学校にしましょう」と生徒に呼びかけたことがあった。そのことが生徒総会で取り上げられ、この中学校をどういうことで日本一にするのか各学級で議論することになった。その後、生徒会で「県下一にならなければ校長の言う日本一にならないから、まずは挨拶で県下一を目指そう」と提案して、それが選ばれた。これは、生徒会が中心になって自分たちの学校を少しでも誇れる良い学校にしたいという生徒の自浄作用の現れといえる。

2) 誇りを持って校歌を斉唱する

何人かの生徒のアイデアで生徒総会に入る前に、愛校心を高めるために生徒会が全校生徒に校歌を斉唱させている。この校歌斉唱では、指揮もピアノ伴奏も生徒が行う。最初から声が小さかった時は、指揮者が「もう一度最初からやり直してください。大きな声で誇りをもって歌いましょう」と全校生徒に呼びかける。ここに生徒の育ちの姿が見える。

3) 式では生徒の私語はない

以前までは教員が「静かにしなさい」と言い続けてきた全校集会、始業式、終業式、卒業式、入学式だが、いずれの集会や式においても、今では私語をする生徒はいなくなった。生徒総会においても私語をする生徒は一人もいない。むしろ、私語をするのは、後ろにいる保護者の方のみである。

(2) 体験学習の重視

校長がこの中学校に着任する前から、この学校では体験学習を重視していた。以前の校長も、この学校の荒れた状況を改善するために体験学習に取り組んできたのである。現在では、その体験学習を「総合的な学習の時間」に位置づけ、生徒に心豊かな人間性、社会性、道徳性を身につけさせようとしている。

例えば、1年生の「地域調べ学習」では、フラワータウン(花いっぱい運動)という花を育てる活動に参加し、その活動を通して生活環境に関心を持ち、勤労の大切さを身につけさせることをねらいとしている。2年生の「職業体験学習」では、町内の様々な職場を訪問し、その仕事を実際に体験することによって、自分の身の周りにどんな職業があって、自分たちの生活をいかに支えているのかを考えさせることをねらいとしている。ま

た、地域で働く人々の姿を見ることで、今後の自分自身の生き方や進路決定について考え、主体的に生きる態度を身につけさせようとしている。3年生の「福祉体験学習」では、町内の幼稚園、県立の養護学校、福祉施設を訪ね、異世代の人々や障害のある人々との交流を通して、同じ時代を生きる人間としてお互いに関わり合い、学ぼうとする態度を身につけさせることをねらいとしている。

この学校には花を愛する教員がおり、校内には生徒の心を癒すために沢山の花が植えられている。ところが、過去に学校が荒れた際、花にはいたずらをする生徒がいなかった。その理由に1年生の時の体験学習をとりあげ、「フラワータウンで自分の手で花を育てた体験が大きく影響していたのではないか」と校長は分析する。

(3) 校内の授業研究会と生徒からの授業評価

校長が着任して最初の2年間は、荒れた学校を立て直すために生徒指導の先進校に教員が視察に行くなど、生徒指導を強化する考えが強かった。しかし、学校という所は基本的に授業が分からなければ面白くないし、授業を生徒にとって分かるものに改善しなければ、この学校の根本的な問題を解決することに繋がらないのではないかという方向に校長の考えは変わった。

そこで、これまでこの学校が取り組んできた授業研究テーマ「生徒が主体の学習集団づくり」という方向性は継承し、まず教員全員が一度は自分の教科の指導案を書いて授業を行い、その授業について批評を受け、もう一度指導案を書いて授業を行うという方法が校長を通じて教務主任から発案された。この案は職員会議で了承され、この中学校の授業研究会が始まった。

この授業研究会の具体的な流れは別途表示するように(収集資料)、教員全員が1学期の締め切り日までに1回指導案を書いて提出し、授業を行う。その授業を同じ教科の教員ならびに空き時間の教員に参観してもらい、授業者は授業後に「良かった点」「悪かった点」について自己評価を行う。それを材料にして夏休み中に1学期の授業研究の成果を検討する。2学期には、その教科の授業が1学期の授業に比べてどう変わったのかを生徒に「授業アンケート」で問う。生徒からのアンケート結果を受けて11月から12月にもう一度指導案を書いて授業を行う。同様に、他の教員に授業を参観してもらい、授業者は事後に自己評価を行う。また、1月中旬に生徒に「年間の授業アンケート」を回答してもらい、最後に指導案作成・授業研究を終えての教員の感想や課題などをまとめ、次年度の授業研究に繋げていく。

その成果として、平成15年度の授業研究会に対する教員の感想には、やってみて良かったという意見が多かった。そうした教員の有効感覚が平成16年度の「道徳」の授業研究会に繋がった。また、2年前から「授業のB中へ」という言葉が生徒の口から出るようになり、昨年度の卒業式には、卒業生の答辞の中で「授業のB中」という伝統を後輩に引き継いで欲しいという言葉が述べられた。そうした生徒からの言葉が、教員の授業改善に対する意欲をさらに掻き立てるのである。

(4) 全教員による「道徳」の授業研究会

昨年度の教科による授業研究会に引き続き、今年度は「道徳」で授業研究会を行って

る。「道徳」を選んだ理由は、一つは教員の授業に対する意識が高まっており、同時に授業での生徒の学びのレベルも高くなり、学校そのものの様子も落ち着いてきたが、その理由を探求するために「道徳」は非常に分かりやすいのではないかと考えたからである。二つめの理由は、担任であれば、教科に関係なく「道徳」の授業をしなければならないからである。教科のみの授業研究はその教科に限定されるため、学校全体で授業研究に取り組むことが困難である。しかし、各教員に共通する「道徳」を取り上げれば、教員全体の指導力向上に繋がると考えたのである。三つめの理由は、校長は学校が落ち着いてくると不登校生徒が増加すると予想しており、不登校生徒への対応としてこの学校の生徒の「道徳」という特性を高めておきたいというねらいがあったからである。

全教員が一度は「道徳」を本格的に研修するという意味で、「道徳」を専門とする2名の大学教員を学校に招き、講義を受けた後に、学級担任が「道徳」の指導案を書き、授業を行った。その授業を大学教員に参観してもらい指導・助言を得た。各担任は各教科の指導案を書いた経験はあっても、普段書いたこともない「道徳」の指導案には自信が持てなかったようだが、全ての学級担任が指導案を書き、授業を行うことによって、教科という垣根を越えて全教員の「道徳」の授業の質が向上するのではないかと期待されている。来年度は全教員が「道徳」の指導案を書き、授業を行う予定だが、外部からの研究指定を受けず全校をあげて自主的に「道徳」の授業研究に取り組んでいる点は、この中学校の大きな特色である。

(5) 異種校・異学年との交流活動

校長がこの学校に着任した当時の3年生の荒れを解決するため、中学校の隣にある県立高校に進学希望の生徒のうち、特に問題のある生徒を体験入学としてその高校のラグビー部の練習に参加させたことが高校とのクラブ間交流の始まりであった。高校生との部活動を介した交流体験には、高校の部活動の実態を知ったり、将来の進路を決定したりするのに効果があった。また、現在では、体育系クラブだけでなく、文化系クラブでも連携している。美術部や音楽部も高校の部活動に参加し、高校の教員に指導してもらっている。今年度は、その高校のプラスバンド部がB中学校の文化祭で特別に演奏する予定になっている。その他にも、町内の清掃活動では、その高校の生徒と一緒に清掃活動に取り組んでいる。

また、この中学校の体育祭は、5グループからなる縦割りの異年齢集団で行っている。3年生は夏休みから体育祭の企画を行う。体育祭の準備や練習も3年生が中心になって夏休み中に実施するため、2学期に入って体育祭の準備や練習によって授業時数が圧迫されることはない。体育祭では、保護者が各グループの出来映えを評価するため、各グループの3年生は優勝を競って必死になって企画し、後輩たちへの指導を行う。

さらに、県立の養護学校には、3年生が体験学習でお世話になっているが、夏期保育・福祉ボランティアでも連携している。これは、養護学校の保護者から夏休みに夏期保育を行って欲しいという要望があり、3年生が2週間ほどグループになって養護学校の子どもたちのお世話をしている。また、養護学校の体育会の準備にも生徒会の役員が援助に行ったりしている。

このように、この中学校では、生徒が自校の枠に閉じこもることなく、社会の構成員の

一人として自覚できるように学校外の人と関わる場が用意されている。

(6) 校門での挨拶運動とお昼の対話活動

この中学校は、伝統的に正門と裏門において挨拶運動を行ってきた。教員はもちろん生徒会の生活委員の生徒も校門のそばに立って朝夕の登下校する生徒に挨拶運動を行っている。

また、教員はお昼になるとお弁当を持って教室へ行き、生徒と一緒に昼食をとる。昼食が終わると、教員は廊下などで生徒と対話活動を行う。このように教員は早朝からお昼まで生徒と行動を共にし、絶えず生徒とコミュニケーションが図れるよう努力している。この対話活動もかつては、荒れていた生徒が喫煙などをしないように、教員が巡視するという意味で行っていたものである。しかし、そういう荒れた状況が全くなかった今も、教員に親近感を持ってもらい、話しやすい教員と自由に会話ができるように、できる限り教員の方から生徒に話しかけるようにしている。かつて荒れていた頃のB中学校を知る教員が多い時はよいが、教員の異動等によりそうした教員が少なくなった時、再び学校が荒れる可能性もあるため、その再発防止に努め、今もなお生徒との対話活動が続けられている。

(7) 小学校の保護者への「学校だより」の配布

保護者には当然「学校だより」を届けるが、この中学校では町の教育委員会にもそれを届けるようにしている。校長が小学校長であった頃は、校区も限られていたため町内の住民にも「学校だより」を配布していた。しかし、中学校の場合、校区が広いので「学校だより」が配れず、保護者以外の住民にはほとんど学校の取り組みが理解されていない。そこで、校長は、年に1度中学校区の住民に「学校だより」を配布したいと考えている。

その前段階として、昨年度は、中学校区内の小学校の保護者にこの中学校の「学校だより」を配布した。この中学校に進学する予定の小学生の保護者にも「学校だより」を配布しておけば、少しでもこの中学校に関心を持ってくれるのではないかと期待しているからである。

4. 学校改革を成功に導いた要因

(1) 校長の学校改革の理念の浸透 - この学校の悪いイメージを変えたいという熱意 -

この学校を落ち着いた学校へと変えた要因の一つは、校長が「この学校の悪いイメージを変えたい」という強い思い(=愛校心)を持っていたことである。

校長がこの中学校に着任する前に、この中学校の校区内の小学校長をしており、課題の多い学校ではあったが、そのときの小学生は比較的荒れることもなく、それなりに明るい児童であるとの印象が強かった。そんな児童がこの中学校に進学すると、周りから問題や課題のある中学校の生徒として見られてしまう状況に憤りを感じ、この中学校の悪い印象を変えたいという思いを校長は持っていた。

しかし、一般に教員が持つこの中学校の印象も同じであった。この学校が荒れていた頃、教員人事において、以前校長がいた小学校やB中学校への異動が決まると、行きた

くないという気持ちになる教員が多くいた。しかし、校長は、「B中学校に行って自分を高めようとか、生徒指導についてB中学校で勉強してみようとか、授業ではB中学校の先生がいるから行ってみたい」と一人でも多くの教員に思ってもらえる中学校にしたいという思いを常に持っていた。

ところが、いったん染まった学校のイメージはそう簡単に払拭できるものではない。そこで、校長は全校集会などで生徒に、「君たちは、胸を張って私はB中学校の出身ですと言いたくないのか。B中学校の出身と言うのが恥ずかしいと思うような学校にはいけない。良い学校を創っていくのは自分たちだ。先生たちがいくら頑張っても、君たちにそういう気持ちがなければどうにもならない」ということを訴えてきた。

校長は、この中学校を良い学校に変えていくために次々と学校改革に着手した。まず校長自身が始めたことは、校門での挨拶運動を通じて全校生徒の名前を覚えることであった。その後、「問題行動を起こした生徒への厳しい対処」、「面白い分かる授業を目指した授業研究への取り組み」、「生徒の授業評価の導入」、「始業2分前行動の徹底」、「クラブ活動の重視」、「生徒会活動の活性化」、「体験活動の重視」など校長の考えが教頭や教職員の努力によって実現されていった。つまり、校長の思いが教頭や教職員に受け入れられ、教職員のこの学校を良くしたいという気持ちを喚起したのである。

最終的に、その成果は生徒の行動にも表れるようになった。生徒総会で議論された「日本一の学校」はその成果を最もよく表している出来事といえる。その出来事について、校長は、自分の思いがある程度生徒に伝わり、自分たちがこの中学校を良くしようという思いを生徒会が持ってくれたことに涙が出るほど感動したという。これは、校長のこの学校に対する熱意が確実に生徒の心に伝わり、生徒の心を動かした結果であると考えられる。

(2) 問題を起こした生徒への厳しい対処

校長がこの中学校に着任するまでは、生徒が学校で問題を起こすのは、その生徒の育ってきた家庭環境などが劣悪であったからという理由で、学校がそうした生徒を抱え込んできた。ところが、そうした生徒を学校が抱え込むことで、問題は解決するどころか、学校改善の道も閉ざされてきたのである。そうしたこれまでの学校の対応の仕方を改め、この中学校では、問題を起こした生徒に対して厳しく対処するようにした。

校長が着任した年の2学期初めに、学校が3年生の保護者を集めて臨時総会を開き、学校の方針として対教師暴力と喫煙に対して厳しく対処することを保護者に了承を得ながら対応策を詰めていった。具体的には、喫煙をした場合、即日保護者と三者面談を行い、担任が学習課題を与えて次の日自宅で勉強させる。担任はその朝、家庭訪問をし、その生徒の勉強の様子を確認した後、再び夕方に家庭訪問をし、課題の進み具合について確認する。翌朝、保護者の立ち会いの下に、今後きちんとできるかどうかを本人に確認した後、校長、生徒指導主任、学級担任が協議し、その生徒を教室に戻すかどうかを決定する。こうした学校側の厳しい対処によって、学校における生徒の態度が落ち着き始めた。

ところが、3年前、学校では落ち着いて授業を受けていても、家庭に帰ると再び外で荒れるという生徒が現れるようになった。この場合は、学校の教員だけでは到底対応できないため、警察、教育事務所、教育委員会などの様々な関係機関によるサポートチームを結成してもらい、学校外での荒れに対処することとなった。校長は当時のサポートチームに

ついて「大変有り難かった」と語る。結果的に、学校側の厳しい対応とサポートチームとの連携協力がこの学校の生徒指導に相乗効果をもたらし、今日の落ち着いた学校を築き上げたといえる。

(3) 始業2分前行動の徹底

校長がこの学校に着任した当初、授業開始時刻になっても教室に入らない生徒が多かったため、教員は生徒を早く教室に入れなければ授業を始めることができなかった。しかし、教員は以前から始業2分前行動を行っており、チャイムが鳴る2分前には職員室を出て、チャイムが鳴るまでに生徒全員を教室へ入れるように努力していた。校長は、この始業2分前行動に注目し、教員にも生徒にも徹底した。今では、生徒も始業2分前行動が習慣化され、チャイムが鳴ると同時に授業が始められるように2分前には全員が教室に入り、学習の準備を始めるので、完全な50分の授業時間が確保されている。

また、校長が始業2分前行動を徹底したもう一つの理由は、毎日の授業時間を6時間目まで設定して部活動の時間を減らすことが、必ずしも生徒の学力に結びつかず、むしろ逆効果になるのではないかという考えがあったからである。つまり、多くの学校で見られるように、チャイムが鳴ってから職員室を出て、5分遅れで授業が始まることを考えれば、毎日の授業時間をできるだけ5時間目までにして始業2分前行動を徹底した方が、部活動の時間が多く確保でき、毎日の授業も生徒が集中して受けることができると考えたのである。

基本的な生活習慣として「時間への厳しさ」を身につけさせることで、生徒が落ち着いて授業を受けるようになった。かつて学力が低い中学校と言われてきた学校であるが、現在の生徒の授業態度を見れば、生徒の学力が伸びないはずがないことが理解できる。

(4) 国際交流による生徒の意識変化

この中学校の生徒や教員の意識を大きく変える契機となったのは、海外の学校との国際交流の場であった。

この中学校は現在豪州の学校と国際交流を行っているが、その前に英国の学校から2年間生徒が訪れていた。その際、英国の学校の音楽の教員がこの中学校で音楽の授業を行った。学校が荒れていたこともあったが、文化祭の前日の合唱の練習時に、その音楽の教員は、よそ見をしていた生徒に対して「出て行きなさい」と厳しく注意をした。その瞬間、生徒たちの授業を受ける姿勢が変わり、その厳しい注意に校長は、授業に対する教員の厳しさを知ったという。「授業はきちんと受けなさい」という英国の音楽の教員からのメッセージが生徒たちにも届き、その後の授業がかなり変わったという。教員が生徒に厳しく、そして正しく注意した事柄については、必ず生徒の心に届くことを校長自身が確信した瞬間であったといえる。

その文化祭の当日は、英国の生徒による大変素晴らしい合唱が披露された。ところが、この中学校の生徒は十分な練習をしてこなかったこともあり、全く歯が立たず、生徒は恥ずかしい思いをした。この時の生徒自身が恥ずかしいと思った経験が、その後の文化祭の質を大きく変えていった。それまで担任が学級の生徒を静かにさせていたが、今では生徒が自分たちで文化祭を進行できるようになり、教員は舞台上で合唱が歌えるまでになった。

また、英国の生徒も豪州の生徒も、教員から褒められたり、何かを頼まれたりすると光栄だと思ふ気持ちがある。そして、校長、教員からの要求や期待に応えないといけないという気持ちがある。国際交流で海外の生徒の姿を見る中で、この中学校でも、教員から何か頼まれると光栄だと生徒に思ってもらえるように生徒との信頼関係を築いておかななくてはならないと認識した教員が多かったのではないかと校長は指摘する。

(5) 教育委員会からの支援

この中学校が学校改革に成功したもう一つの要因は、町の教育委員会からの経済的、人的支援である。

この中学校は、体育系の部活動が盛んで、毎年、全国大会、近畿大会に出場する。保護者からの後援会費と町からの予算だけではまかなえない場合には、その不足額を町の教育委員会がすべて負担してくれる。

また、運動面以外にも国際交流で海外研修を行う場合は、経費の半分を町側が負担してくれたり、豪州の学校から生徒が訪れる際の経費も全額町側が負担してくれている。

さらに、人事面から言えば、現在3名の加配教員が配置されており、これによって少人数指導や習熟度別学習を可能にしている。

こうした経済的、人的支援は、この学校が新たな試みを行ったり、教育活動の充実を図ったりする際に大きな支えとなった。これは、この町に中学校が一つしかないという事情もあるが、それだけ町の教育委員会からの期待も大きいことを反映している。

(6) 愛校心をもった「核となる教員」の存在 - 学校改革の原動力 -

学校改革を成功させる上で最も重要な要因は、その学校に、校長が示した改革のビジョンを具体的に実践化できる教員がいるかどうかである。この中学校には、この学校が好きで、生徒たちが好きで、この学校を良い学校に変えたいという思いを持っている教員が多い。学年経営や授業改善で中心的な役割を担っている「核となる教員」はそうした思いを持っている。

1) 部活動の指導を熱心にする教員

部活動に関しては、校長が土曜日の午前中だけでも生徒を指導してほしいと担当教員にお願いしているが、本当に教員は熱心に部活動の指導を行っている。そのことが、部活動の大会成績に影響しているということはもちろんだが、運動では負けないという生徒たちの自信にも繋がっていると考えられる。

2) きめ細かな生徒指導を行う教員

生徒指導では、問題が生じた学級の生徒の家に家庭訪問をする際、担任だけでなく学年主任も一緒に訪問する。普通、学級の問題は担任に任せることが多いが、この中学校の学年主任は担任とペアになって学級の問題を解決しようとする。

このような学年主任が育ってくるかどうかは、その見本となる教員がその学校の中にいるかどうか大きく左右されると校長は指摘する。例えば、3年前に学校が荒れた際、一人の生徒が少年院に行くこととなった。当時の担任は何度も少年院を訪問し、少年院を出てからも生徒が高校に進学するために何度も家庭訪問をした。それから担任は何十回となくその生徒に手紙を送り続け、最後にその生徒が高校入試に行く時に引率までした。この

ように、この中学校を卒業すれば生徒指導が終わるのではなく、その生徒が一人立ちできるまで担任と校長が責任を持って対応に努めた。責任をもって生徒に対応する教員がこの中学校にいるからこそ、他の教員も見習って動くようになるのだと思われる。

3) 授業研究会の核となる教務主任

その担任が今は教務主任となって、校内の授業研究会の中心的人物となり、他の教員の意欲を喚起する存在となっている。教務主任は授業の教材・教具に工夫を凝らし、生徒にとって面白く分かりやすい授業を行うので、生徒からの授業評価も高い。また、校内の授業研究会に向けて最初に学習指導案を書き始めたのも、この教務主任であった。このように自ら範や見本を示し、他の教員に呼びかけるため、他の教員も自然と意欲的に取り組むようになる。

校長は、これらの「核となる教員」がこの中学校の改善に向けて努力し続けるように、学校内外と交渉したり、「核となる教員」が途中で不安な気持ちにならないように配慮することが管理職としての務めであると強調する。

5. 今後の展望と課題

最後に、このB中学校の今後の課題を示すことにする。

(1) 小学校との連携の強化

この中学校は、高等学校、幼稚園、養護学校、福祉施設など、近隣の学校や施設等と連携しながら、生徒の学習活動の充実を図ってきた。しかし、校長も指摘していたことだが、町内の小学校との連携については、まだ十分とは言えない。昨年度から小学校の保護者に向けて「学校だより」を配布するなどの新たな試みも行われているが、それ以外では町の授業研究会においてお互いの授業を参観する程度に終始している。過去にこの中学校の生徒が荒れていたことを考慮に入れれば、町内の小学校と教科や道徳、さらには進路について連携を強めておく必要があると思われる。

(2) 学校評価システムの構築

この中学校の学校改革の特色は、校内の授業研究会の中に生徒の授業評価を取り入れたことである。授業評価を導入することで、生徒の授業への取り組み姿勢が変化するだけでなく、生徒の学習成果を評価する立場にあった教員が、逆に被評価者に授業そのものを評価されるようになり、教員は自分の授業を客観的に見直す機会が与えられることになる。これによってこの学校の授業改善が図られたとあってよい。

ところが、学校評価に関しては学校評議員会や1年中の学校開放などの取り組みによって保護者や地域の意見を取り入れようとしているが、保護者や地域からのニーズや意見は、学校が落ち着きだしてから少なくなっている。そうした現状から、町内に「学校だより」を配布する広報活動に加えて、保護者向けに学校評価を実施し、今後学校が取り組むべき課題を明確にできるような学校評価システムを構築しておくことが必要である。

(3) 安定した加配教員の供給

この中学校が荒れていた頃の状況から考えると、今は驚くほどに落ち着いた良い学校に変わったと教育委員会も評価している。今後の大きな課題は、この落ち着いた状態を昔の状態に戻さず維持することである。そのためには、この中学校の学力向上に有効に機能したと考えられる「加配教員を生かした少人数指導」をいかに維持するかが重要になる。教員数が多くなると授業を行う教員も生徒に目が行き届きやすくなるのでゆとりが生まれ、少人数指導を受ける生徒も手厚い指導が受けられるため、納得しながら授業が受けられるようになる。このような双方の状態が続いていくことがこの中学校には必要であり、そのために加配教員の安定した供給が不可欠であると思われる。 (別惣淳二)

B中学校の時間割

時 間 割

	月	火	水	木	金	
読書	読書 10分×5日=50分					27
1	1	6	11	16	22	
2	2	7	12	17	23	
3	3	8	13	18	24	
4	4	9	14	19	25	
5	5	10選	15選	20選	26卒	
6		校長確保		21選		
終学活	班活動、連絡 15分					
チャレンジタイム	10分×5日=50分 基礎学力：英・数・国					28

* 学校裁量の時間：火曜日の6限
 ・欠けた授業をこの時間で行う
 ・授業を行う時は5限(道徳)と6限(読書)を振り返る

* 2年選択：木曜日の5限(20)

* 3年選択：水曜日の5限(15)

(1) 総合 70時間 (総合35・読書35 10分×5日の帯)

(2) 学校選択35時間 チャレンジ・タイム 10分×5日の帯(基礎学力：英・数・国)

(3) 終学活 15分 点検班活動、連絡等

(4) 朝学活 8:15～8:20 連絡等 読書・タイム 8:20～8:30 10分×5日の帯
 * 職員の打ち合わせ時間(8:05～8:15)

平成15年度授業研究・授業アンケートの取り組みの流れ

1 研究主題（平成10年～）

生徒が意欲をもって主体的に授業に取り組む
生徒が主役の学習集団づくり

2 研究内容・努力目標

- ・教材の精選と確かな学力の保障
- ・丁寧な分かる授業の展開と準備
- ・山場のある授業づくり。効果的な教師の支援・発問
- ・効果的な班学習など、生徒が主体的に活動する場を設定する
- ・低学力生徒、指導困難な生徒に授業の中で活動の場を与える
- ・授業の中での評価活動の工夫、評価規準の設定
- ・上記の計画が見通せる指導案づくり

3 本年度の取り組み

5/21(水)～6/7(金)	各先生、一学期の1時間、授業計画・指導案作成 *同じ形式、パソコンでフロッピーに登録
6月～7月中	計画に沿って授業実施 *そのうち何名かの先生に研究授業として公開してもらう 教科部会または学年会で積極的に授業参観 *町研小中交流会の公開授業も含む *授業実施後、各先生に「良かった点」「反省点」を簡単に書いてもらう
夏休み	全先生の指導案や研究授業から、今のB中の授業形態や展開、評価活動などの特徴をまとめる
8/1(金)	現職教育で、上記の資料をもとに「二学期からの授業づくり」を話し合う
9月～10月中旬	現職教育で得た良い点や改善点をもとに、各先生で、一つだけ「今までと、ここを変えて授業をする」というポイントを意識して日々の授業を進める *各先生に、そのポイントを書いてもらう
中間テスト前	「授業アンケート」実施 *各先生の二学期の授業は、一学期に比べてどう変わったか、どんな点が良くなったかを生徒に書いてもらう。 *まとめて、教科部会で研修に生かす
11/4(月)～ 11/21(金)	一学期同様、 各先生、二学期中の1時間、授業計画・指導案作成 *同じ形式、パソコンでフロッピーに登録
11月～12月中	計画に沿って授業実施 *そのうち何名かの先生に研究授業として公開してもらう 教科部会または学年会で積極的に授業参観 *授業実施後、各先生に「良かった点」「反省点」を簡単に書いてもらう
1月中旬	「年間の授業アンケート」実施
2・3月	まとめて、教科部会・学年会・職員会議の研修に生かすとともに、次年度に引き継ぐ